

<今回>281回目 2020年9月11日(金)15時~18時 601号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p200(4)「分国論」と倭の5王 より

<前回>280回目(20-8-24) 出席者 8名

資料(20-08-24-1)前回のまとめ(清水)

-2) 七支刀の調査1, 2(高山)

A 報告 最初に前回のまとめを紹介した。渡辺妙子さんよりハガキにはしっかりした筆跡でリハビリとデイサービスを受け、外出の予定がたまたま残念とのこと。

七支刀については献上説、下賜説の推移の他、古田説は①倭王旨の存在、②重要な史料は権力と権威に向かって帰属と献上の法則がある。③記紀作成時点で実際の所在が不明だったことが示された(前回読書)

B資料報告、石上神宮七支刀(高山氏調査)について

1) 原本とみなされるカラー図が示された(菅伸生家所蔵)①明治になり神職の世襲が禁止になり明治6年に石上神宮に水戸出身の国学者菅政友(正式には、かんまさすけ)(1824~97年)が大宮司として3年間在職した。(菅政友全集)②禁足地から布都御霊大神(刀剣)の発掘と共に神倉の中から嚴重に封印された木箱を開けると異形の「六叉の銚」を見出した。③神宮旧記に織田信長の軍勢が入京の折、神宮内に乱入し、宝庫の刀を持ち去ったが翌年返却したと記録がある。④宮司を止めた後も史料判読に勤めていたらしい。金象眼に気づき小刀で錆びを落とし文字の判読を試みたが困難で高句麗好太王の碑文文字と似ているという印象を記している。その後星野恒に見せ、共同で解読した。星野恒は「七枝刀考」を発表した。それが現在につながる判読となった。

2) 2012年10月28日元宮司の白石伊佐牟氏が「国宝七支刀の謎」の発表をした。その要旨から菅政友が大日本史の編集に携わり、水戸光圀(家来の大串善)は各地の史書編纂資料を収集させたが石上神宮には見せてもらえなかったから、その調査をするため大宮司を志願してきたという事を言われた。

3) 鎌倉時代に春日若宮の神主だった中臣佑賢日記「建治3年(1277年)8月10日大和神社に捨て置かれた布留の御楯、御銚1本を布留本社に奉置した。その時には、その銚は折れていたとある。

4) 江戸時代には「六叉の銚」と呼ばれて、例年6月30日神剣渡御祭の神事の際、錦袋に包まれ霊代とされ、末社の神田神社に出御されていた。永年人知れず伝世してきたというのは嘘になる。剣の銘文に「百鍊鋼」とあるが折れたことで铸造ではないかと疑問が出たが国宝になって調査は出来ない。

C 読書 朝日文庫本の p191 三「使者」の問題

1) 古事記 百濟照古王の使者は阿知吉師、馬2頭と横刀と大鏡(古事記の事例75例を挙げて横刀は佩刀の意味を証明)日本書紀は七枝刀・七子鏡と使者は久氏らと記し記紀は同じではない。

2) 四「年代」の問題 記は応神即位後、紀は神功紀

3) 五「削除問題」 紀は百濟記を採用し、国内伝承を削った。(継体没年と同じ扱い)

4) 何時石上神宮に入ったのか。①神武の高倉下の時、②墨之中王の反乱の舞台、紀では③茅渟の菟祇川上宮から剣1千口を石上神宮に収め物部首の始祖に管理させた。④八尺瓊を犬が獣の腹から取り出して石上神宮に収めた。これらは記紀作成時に石上神宮に七支刀はなかった証拠である。

5) 新羅の王子、天日槍の招来した宝物を孫清彦に見せよと持ってこさせた。(宝物例省略)そのうち「出石の小刀」は出すのを渋ったが、石上神宮から自然と淡路島に行き、祠に祀られる。

6) 結論①記紀成立時点では七支刀は石上神宮にはなかった。②七支刀はは伝承していた国から献上させられ天皇の神庫(石上神宮)に入った。その記録はない。

次回日程 20-9-25(金) 15時から18時 601号室